

その思いを制服に込めて

装幀 鈴響雪冬

はじめに

この作品は、イラストコミュニケーションサービス「pixiv」においてaroha氏がファンタジーを盛り上げるために行っているユーザー企画「pixivファンタジア」の十回目、「pixivファンタジア Last Saga」(以降、PFLS)において、鈴響雪冬が投稿していた小説「流浪の裁縫師」のスピノフ作品です。国や城などの地名、国王や提督などの要人については、aroha氏が創作したものであり、それらにまつわる設定の一部は他の企画参加者による解釈の引用が含まれます。一方で、本作の主要な登場人物、サーヤ・ストラ、クイナ・ブング・ベルガー、ミュゼ・ガロック等については私による創作です。

本作を読む上でPFLSの公式ストーリーや「流浪の裁縫師」の本編を読む必要はありませんが(必要ないように書いたつもりです)、興味を持った方は企画ページにアクセスして頂ければ幸いです。全ての作品は無料で閲覧できます。もし機会があれば、未来のpixivファンタジアの戦場で対峙しましょう。

PFLS公式ページ……………<https://www.pixiv.net/special/pfls>
作者公式ページ……………<https://snowysnow.sakura.ne.jp/>



PFLS公式ページ



流浪の裁縫師
(pixiv内)



流浪の裁縫師
(作者ページ)

登場人物紹介

サーヤ・ストラ（24歳・女性・織匠・魔法織物師）

ノーザリア連邦アイスブランド州出身。裁縫学校を首席で卒業。卒業後しばらくは世間的に華やかな職業である裁縫師を名乗っていたが、先の大戦の最中に魔法織物を開発して以来、本来の職業である織匠を名乗っている。代表作は、戦後に開発した、断熱、発熱効果を持つ（ヒートクロス）。サウナ派。

クイナ・ブング・ベルガー（21歳・女性・剣士・織匠）

ファイアランド連合ローレルランド王国出身。先の大戦の前、旅の途中でサーヤと出会い、戦時中はサーヤの護衛を勤めていた。戦後は一度実家に帰るものの、サーヤの元に戻り織匠として一緒に働いている。獣族のクォーターでいぬ耳。湯船派。

ミュゼ・ガロツク（24歳・女性・裁縫師）

ノーザリア連邦クールモリア州出身。サーヤと同級生で次席。クールモリアの著名な仕立屋、ガロツク裁縫店の八代目当主かつ初の女性当主。ミュゼの代から女性向けの衣装にも進出を果たす。サウナ派。

※ノーザリア帝国（ノーザリア連邦）

ラスト大陸北部の国。一年を通して雪と氷に覆われた凍てついた地。首都はアイスブランド。先の大戦の後、ノーザリア連邦に再編された。魔法よりも剣に重きを置く国柄。

ノーザリア連邦評議会

ノーザリア連邦発足時に誕生。各州の代表と副代表によって構成された国家元首組織。現在の議長は、皇帝だったゼラに後を託されたレイオン。

※ファイアランド連合

ラスト大陸西部にある五つの国からなる連合国。現在にはエゼル王が国を束ねている。豊富な鉱物資源と鍛冶の技術により、日々新たな武器の製造や発明が行われている。戦後、ゼラ皇帝を幽閉した。

リユースグリ村

ノーザリアの南方に位置する数十世帯の村。暖かい気候。水力式紡績機が何台も稼働し、糸作りが盛ん。以前、サーヤとクイナが滞在していた。

魔法の染料

サーヤの発明品。魔法に反応する植物や鉱石などから取り出した染料を組み合わせて作った染料。数百種類の組み合わせや配合を比率などを試した結果、特殊効果を持った染料の開発に成功した。代表作は誘魔効果の染料、魔法防御の染料。

誘魔効果の糸

サーヤの発明品。周囲に漂う魔力を引き寄せる効果を持つ糸。前項の誘魔効果の染料を用いて綿糸めんしを染め上げることで完成する。この糸で布に魔法陣を描く（刺繍や織り込みなど手段は問わない）ことでその魔法陣に魔力が供給され、魔法が発動する。

魔法織物（魔法生地）

サーヤの発明品。前項の誘魔効果の糸で魔法陣が刺繍され、魔法の効果を持った生地のこと。魔力の収集から発動まで自然に行われるため、持ち主に魔法の素質がなくても発動する一方で、効果の変更がでない、強力な魔法にはならない、魔法陣に切れ目が入ると効果が失われる、効果範囲が魔法陣の周辺に限定されると言った欠点を持っている。

魔法織物に対して、染料そのものに魔法が宿っており、その染料で染めただけで魔法が発動する生地のことはもっぱら魔法生地と呼ばれる。

ヒートクロス

サーヤが開発した魔法織物。強力な耐寒性能を持つ生地だが、普及率は今ひとつ。ベースになった魔法陣は、ノーザリアに侵攻するために他国が開発した耐寒魔法陣をサーヤが極秘に入手して改良したもの。

※ゼラ皇帝

ノーザリアの皇帝。ラスト大陸の統一を志して侵攻を開始、三国による最終戦争を引き起こすが、ファイアランドとの戦に敗れ、幽閉されている。

※ユキ様

ノーザリア帝国にたどり着いた異国の少女。ゼラ皇帝に才能を認められ軍師になる。ゼラ皇帝の幽閉に付き添う形でファイアランドにいる。

※オールン

ファイアランドで日々発明を行う天才科学者。先の大戦の後、忽然こっぜんと姿を消す。

※はPFLS公式キャラクターなど

第一章

長い長い、長い冬が終わり、短い夏を迎えるその少し前の、ふっ、と、寒さが緩んだかなと錯覚する季節。夏用の生地の納品はとくに終わり、先日からまた冬用の生地の生産を始めている。

「夏も来てないのに冬用の生地作りなんて、一年中冬の気分だわ」

途切れた集中力の被害者を増やすため、織機に向かつて作業中のクイナの側まで近づきながら言う。

「なにを今更……。この国に夏なんてないでしょう」

クイナは緯糸を巻き付けたシャトルを慣れた手つきで交換しながら正論を言う。夏用の生地なんていいながら、冬用の生地とほとんど作りは変わらない。自らの製品で夏の存在を否定している事に気がつき、「まあね」と言い返すのが精一杯だった。それでもノーザリア国民にはノーザリア国民としての言い訳がある。

「そりゃあ、クイナの故郷から見たらこっちの夏なんて

春の手前ぐらいかもしれないけど——」

「サーヤがどれだけ夏と言いつても、雪が解けない時点で冬ですよ、私にとっては」

「…はい」

押し問答にすらならない一方的防戦を強いられている間にクイナは緯糸の交換を済ませると、織機が再び動き出す。オーブン式織機の導入から一年が経ち、改良が加えられたそれは、初期型よりもトラブルは幾分少なく、第二工房の本格稼働や、クイナが仕事を覚えたことで順調に出荷量を増やしている。緯糸を発注しているリユースグリ村も住み込みの作業員を募集していると聞いた。

生地作りが軌道に乗ったことで、私の仕事は以前のように魔法の収集と魔法陣の研究に注がれている…と言いたいところだけど、日々押し寄せてくる発注書に追いつけられている。私の代表作であるヒートクロスは細々と売れてはいるものの、製品そのものに欠点も多く、爆発

的に売れているとは言いがたい。注文の多くは一般的な綿布めんぷなのが現状だ。もしかしたら魔法に触れる機会が少なく、魔法に懐疑的な国民性もあるかもしれない。

この工房のなかが評価されているのか。それは、いままです作業だった模様の表現を刺繡すいじゆに依らず機械で織り込むことができるということだ。つまり、まあ、機械の性能だ。私はそんな普通の、気の乗らない注文をこなしながら、片手間でヒートクロスの要である魔法陣の簡略化や新しい染料の開発を進めている。

魔法の力を宿した植物や鉱石などから染料を作り、それによって染められた糸を使って生地に魔法陣を織り込んでいくことで、一年中雪と氷に覆われたこの世界でも快適に生活できるだけの暖かさを持つ魔法の生地になる。数年の歳月と私財のほとんどをなげうって開発したヒートクロスは私の代表作の**はず**であり、防寒性第一、おしゃべりは二の次というこの国の人々の装いを変える魔法の布なのだ。下着二枚に上着二枚、さらに上から羽織つて：なんていう光景は過去にしまいたい。

だけど、世間一般から見たサーヤ・ストラ機織りはたお工場の代表製品は、工業製品なのに模様がついた布である。

そういう理想と現実のギャップも、私の集中力を奪っているのかもしれない。

それを解決するためには、ヒートクロスの最大の欠点であり出荷が伸び悩む原因である、魔法陣に切れ目を入れると効果がなくなる、を早く解決しないといけない。

だけだ。

乗り気じゃない普通の生地の方は売り上げも良く、作業員を雇って第二工房を動かせるだけの収入があるだけに、そんなに無理をしなくてもいいかな、なんて思ってしまう。それがいけないことだと分かっている。

「そういえばサーヤ」

「どうしたの？」

負の思考回路に陥っていたところにクイナの助け船が入る。それが目的ではないと分かっている、断ち切ってくれたことに心の中で感謝した。

「この織機に蒸気機関を導入するという話はどうなったんです？」

「あー、それね」

私はひとまず相槌を打ちながら、進捗状況を思い浮かべる。古巣であるアイスブランド大学の研究室と共同開